学習指導要領の内容（2）エ「国際的な要素をもった文化が栄え…ことを理解させる」、（3）ア「元寇…など、その間の東アジア世界とのかかわりに気付かせる」、（4）ア「ヨーロッパ人の来航について理解させる」に示す内容を、学習指導要領に示していない内容として扱っており、不適切である。

原　文

発展的な学習　イスラム世界の形成

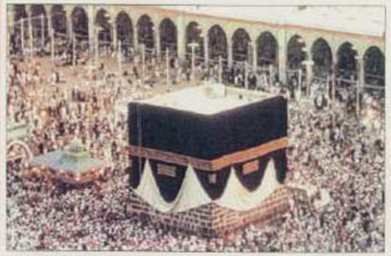
7世紀、日本では「大化の改新」のころ、アジア大陸の西に位置するアラビア半島で、新しい宗教が生まれました。その新しい宗教はイスラム教といいます。その勢力は、奈良・平安時代には、西アジア全域を包む大帝国に発展していました。広大な帝国であるイスラム世界とは、どのような世界だったのでしょうか。

【新しい宗教の誕生】

イスラム教は、仏教、キリスト教とともに、世界三大宗教の一つに数えられますが、そのなかではいちばん新しく、7世紀のはじめアラビア半島で、ムハンマド（マホメット）によって開かれました。

ムハンマドは、ただ一つの神アッラーの啓示を受けた預言者であるとし、「ただ一つの神アッラーの前に人々は平等である」と説いたのです。イスラム教は、仏教やキリスト教とちがって、偶像に礼拝することを禁止しています（偶像禁止）。

ムハンマドの教えを記録したものを「コーラン」といい、イスラム教徒は、この「コーラン」にしたがって生活しています。たとえば、ブタの肉を食さないこと、1日5回のおいのりをささげることなどです。金曜日は礼拝日で、イスラム教徒は、仏教の寺、キリスト教の教会にあたるモスクに出かけて、メッカの方角に向いて礼拝します。


聖地メッカ

【イスラム世界の拡大と大旅行】

イスラム世界には、長い年月を通して、さまざまな民族によって、それぞれの帝国がつくられましたが、宗教はもちこまれることはありませんでした。その支配者もイスラム教徒になり、イスラム世界はいっそう拡大したのです。

インド洋を行く貿易船　イスラム商人は、冬には北東のモンスーンに乗って、インド半島の沿岸部を北側から南側へ、東側から西側へと航海し、4月のはじめごろから5月の末、8月の末から9月のはじめごろにはインド洋の沿岸を南側から北側へ、西側から東側へと航海した。船をあやつっているのは黒人である。

【イスラム商人の活動】

このイスラム世界の拡大にともなって、アラビア商人はラクダで、砂漠を横断し、帆船に乗って、インドネシア、さらには中国とも交易しました。その結果、イスラム商人によって東西の物産が交流し、それとともにイスラム教もさらに広まっていきました。

当時、この広大なイスラム世界を西から東へと大旅行をする者があらわれました。13世紀末、イタリアの商人マルコ=ポーロは、モンゴル帝国を陸路で中国に行き、帰りは海路でインド洋をわたって帰国しました。それをもとに書かれたのが『東方見聞録』です。14世紀前半、モロッコのイブン=バトゥータは、北アフリカから中東地域、インド洋沿岸諸国、さらには中国にまでおよぶ前後30年間の大旅行をしました。そのときの各地のようすをまとめたのが『三大陸周遊記』です。これらの見聞録は、当時のイスラム世界各地域の状況を伝える貴重な記録です。また、「シンドバットの冒険」や、「アリババと40人の盗賊」がのっている『アラビアンナイト』は、当時のイスラム商人の活躍を思いおこさせる物語なのです。

古代のインド　1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
アラビア　١ ٢ ٣ ٤ ٥ ٦ ٧ ٨ ٩ ٠
ヨーロッパ　1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
現代　1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
数字の発達

【文化の継承と発展】

イスラム帝国は、ヨーロッパ世界が分裂状態にある10世紀のあいだ、ギリシア文化、ローマ文化を継承し発展させるとともに、インドなどの文化をもとり入れ、東西の文化を融合させて新しい文化をつくっていきました。そして、それらをルネサンス時代のヨーロッパが学び、近代科学を生み出したのです。例えば、インドの数字からアラビア数字がつくられ、それがヨーロッパに伝わって、現在の算用数字となりました。また、化学や医学の用語であるガーゼやアルコールは、アラビア語がもとになっているのです。

繁栄をほこったイスラム世界も、産業革命をへたヨーロッパ諸国の強力な軍隊に敗れて、分割されてしまいました。さらに20世紀に入り、石油が産業の中心になると、その石油の利権をめぐってヨーロッパ・アメリカが中東諸国との関係を深めようとはたらきかけ、石油利権を独占しました。第二次世界大戦後の中東地域をめぐる紛争の背景には、宗教・民族問題と石油問題があるのです。

アラビアの油田

修　正　文

もっと知りたい　イスラム世界の形成

7世紀、日本では「大化の改新」のころ、アジア大陸の西に位置するアラビア半島で、新しい宗教が生まれました。その新しい宗教はイスラム教といいます。その勢力は、奈良・平安時代には、西アジア全域を包む大帝国に発展していました。広大な帝国であるイスラム世界とは、どのような世界だったのでしょうか。

【新しい宗教の誕生】

イスラム教は、仏教、キリスト教とともに、世界三大宗教の一つに数えられますが、そのなかではいちばん新しい宗教です。これは、アラビア半島のメッカで生まれたムハンマド（マホメット）によって7世紀のはじめに開かれました。

ムハンマドは、ただ一つの神アッラーの啓示を受けた預言者であるとし、「ただ一つの神アッラーの前に人々は平等である」と説いたのです。イスラム教は、仏教やキリスト教とちがって、偶像に礼拝することを禁止しています（偶像禁止）。

ムハンマドの教えを記録したものを『コーラン』といい、イスラム教徒は、この『コーラン』にしたがって生活しています。たとえば、ブタの肉を食さないこと、1日5回のおいのりをささげることなどです。金曜日は礼拝日で、イスラム教徒は、仏教の寺、キリスト教の教会にあたるモスクに出かけて、メッカの方角に向いて礼拝します。

聖地メッカ

【イスラム世界の拡大】

イスラム教徒の軍隊を率いたムハンマドは、7世紀の前半には、アラビア半島をほぼ統一しました。ムハンマドの死後、後継者たちはさらに領土を拡大し、8世紀には、ヨーロッパ世界を三方から取り囲むほどの大帝国を築きました（イスラム帝国）。

インド洋を行く貿易船　イスラム商人は、冬には北東のモンスーンに乗って、インド半島の沿岸部を北側から南側へ、東側から西側へと航海し、4月のはじめごろから5月の末、8月の末から9月のはじめごろにはインド洋の沿岸を南側から北側へ、西側から東側へと航海した。船をあやつっているのは黒人である。

【イスラム商人と大旅行】

イスラム世界の拡大にともなって、イスラム商人たちは、ラクダに荷物をつんで、砂漠を横断し、帆船に乗って、インドネシア、さらには中国とも交易しました。その結果、東西の物産が交流し、それとともにイスラム教もさらに広まっていきました。

当時、広大なイスラム世界を西から東へと大旅行をする者があらわれました。13世紀末、イタリアの商人マルコ=ポーロは、モンゴル帝国を陸路で中国に行き、帰りは海路でインド洋をわたって帰国しました。それをもとに書かれたのが『東方見聞録』です。14世紀前半、モロッコのイブン=バトゥータは、北アフリカから中東地域、インド洋沿岸諸国、さらには中国にまでおよぶ前後30年間の大旅行をしました。そのときの各地のようすをまとめたのが『三大陸周遊記』です。これらの見聞録は、当時のイスラム世界各地域の状況を伝える貴重な記録です。また、「シンドバットの冒険」や、「アリババと40人の盗賊」がのっている『アラビアンナイト』は、当時のイスラム商人の活躍を思いおこさせる物語なのです。

古代のインド　1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
アラビア　١ ٢ ٣ ٤ ٥ ٦ ٧ ٨ ٩ ٠
ヨーロッパ　1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
現代　1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
数字の発達

【文化の継承と発展】

イスラム帝国では、ギリシアやローマ、インドの文化をとり入れ、東西の文化を融合させて高度な文化をつくっていきました。例えば、インドの数字からアラビア数字がつくられ、それがヨーロッパに伝わって、現在の算用数字となりました。

また、化学や医学の用語であるガーゼやアルコールは、アラビア語がもとになっているのです。これらは、中国でおこった羅針盤・火薬・紙の製法とともにヨーロッパに伝わり、近代科学を生み出したのです。

繁栄をほこったイスラムの帝国も、19世紀に入ると、ヨーロッパ勢力の干渉に苦しめられるようになり、領土もしだいに奪われていきました。さらに20世紀に入り、石油が産業の中心になると、その石油の利権をめぐってヨーロッパ・アメリカが中東諸国との関係を深めようとはたらきかけ、石油利権を独占しました。第二次世界大戦後の中東地域をめぐる紛争の背景には、宗教・民族問題と石油問題があるのです。

アラビアの油田